

学生の農村ワーキングホリデーの現状について

—和歌山県における取組を事例に—

Current Status of Rural Working Holiday Activities for University Students: Case Studies in Wakayama Prefecture

阪井 加寿子¹

¹ 和歌山大学紀伊半島価値共創基幹 食農総合研究教育センター

農村ワーキングホリデーは、都市農村交流の一つの形態であり、その効果は労働力の提供による農業振興、農業体験による「食」や「農」への理解醸成など多方面に及ぶ。学生を対象とする農村ワーキングホリデーについては、学生特有の制約はあるものの、労働力としての期待や交流による農家への鏡効果が論じられている。和歌山県における事例研究では、農家側の負担の軽減や、学生の特性を考慮するなどワーキングホリデーが持続する仕組みがみられ、さらにITを活用し全国的な学生参加を可能にしている。このような学生の農村ワーキングホリデーの現段階の意義は、①労働力提供という学生の社会貢献活動、②学生の農業・農村についての学びの提供、③地域における農的関係人口の創出である。

キーワード：農村ワーキングホリデー、都市農村交流、援農活動

1. はじめに

1.1 研究の背景

わが国では、農村ワーキングホリデーについては、都市農村交流の多様な取組の一つとして捉えられる。1990年～2000年代、農村では過疎化や高齢化の深化により集落の寄合や道普請などの共助活動が減退し、集落機能が低下していった。農業・農村の振興策としてグリーンツーリズムなどの多様な都市農村交流事業が、導入・展開された。宮崎県西米良村や長野県飯田市では、それぞれ1997年、1998年に交流人口の拡大や農作業の季節的労働力の確保のために、行政が仲介して、都市住民が農村に滞在して農業を手伝う「援農」の取組が始まっている。

このような都市住民の援農活動を「農村ワーキングホリデー（以下、農村WH）」と捉え、都市農村交流研究では、「農林業・農山村に関心を持ち、田舎暮らしや農林業を体験してみたいと希望する都市住民に、繁忙期の農林家が寝食を提供することで労働力を得る仕組み」と表現される^[1]。そして、その効果は労働力の提供による農業振興だけでなく、農業体験による「食」や「農」への理解醸成、新規就農や農村移住につながる定住促進や関係人口の創出、観光振興など、多方面に及ぶと評価され、また、地域と大学の域学連携の面からも、地域の活性化や人材育成に資すると期待されている。

1.2 研究動向と本稿の目的

大学生等の学生を対象にした農村WHについて先行研究をみると、受け入れの内容・仕組みを取り上げた研究や実施効果を考察した研究がみられる。竹本（2005）は、学生の農村での宿泊実習についての研究から、受け入れる農家側の負担、学生の農作業の質の問題、また学生側にとっては、作業内容と期待とのミスマッチを課題と捉え、実習を行うには現場の調整機能が必要であると指摘している。また、藤井ら（2015）は、実施効果について交流による鏡効果を取り上げ、農家の誇りの回復や農村コミュニティの活性化につながると指摘している。

一方、学生の農村WHを「労働力補完を目的にした援農ボランティア」と捉え、労働力の面から考察した研究がある。今野ら（2021）は、講義時間等で毎日の参加が難しい、卒業等による構成員の入れ替えがあることから、学生の援農ボランティアは、臨時雇の代替となることは難しく、労働市場の枠の外にある労働力であると分析した。また今野ら（2023）は、学生の有償ボランティアの参加条件についての研究から、学生の参加動機の強さは専門分野との関連性が大きく、有償（最低賃金水準など）による金銭的報酬、農家との交流や満足感などの心理的報酬、活動内容、送迎などの受け入れ環境の組み合わせが参加インセンティブとなると指摘した。

農村WHは、農業振興や地域振興など多方面の効果が期待されている。先行研究では、学生が対象の農村WHも、労働力としての期待や交流の鏡効果が論じられ、学生の特性やそれを加味した参加条件などが分析されているが、研究蓄積はまだ多くない。本稿では、学生の農村WHがさまざまに広がりつつある和歌山県を事例に、その仕組みや参加者の感想を分析し、学生の農村WHの現状を明らかにする。

1.3 研究方法

本稿では、(1) 和歌山県田辺市上秋津地区における農村WHの受け入れ、(2) 和歌山大学地域交流援農サークル「agrico. (アグリコ)」の取組、(3) 和歌山県が提供するWebアプリ「わかやまCREW」を事例に、学生を対象とする農村WHの仕組みを分析し、また、上秋津地区における農村WHに参加した学生へのアンケート結果から学生の感想を分析し、農村WHの特徴や意義を考察する。

アンケートの分析にあたってはテキストマイニングを活用した。テキストマイニングは、農業農村研究において数々の分析事例があり(山口ら2014)、膨大なテキストデータの内容把握やアンケートの自由回答文などへの適用の有効性が指摘されている(山口2020)。本稿では、品詞の分解・抽出や共起性を探ることができるKH coder^[2]を使用し、階層的クラスター分析を行った。

2. 和歌山県における学生の農村WHの受入事例

2.1 田辺市上秋津野地区における農村WHの受入

田辺市上秋津地区は、旧田辺市の市街地近郊の農村地域である。近隣地域からの転入により混住化が進み人口の大きな減少はみられないが、農家の高齢化などにより、急傾斜で栽培条件の厳しい農地から廃園が増加している。上秋津地区の農業の現状について、2020年農林業センサス農林業経営体調査からみていく。当地区ではほとんどの農地で果樹が栽培され^[3]、果樹の栽培品目別農家割合(図1)をみると、梅は85.4%の農家で、温州みかんは73%の農家で、晩柑類などその他柑橘は65.2%の農家でそれぞれ栽培され、柑橘の複合経営が行われている。また、栽培農地の多くは山の斜面を利用した中山間地農業である。農地の面積をみると、2ha以上の農家は31.1%(県全体14.1%)で、これらの農家では、農業経営が中心になっていると推測される。さらに家族による個人経営の農家がほとんどで^[4]、労働力は、経営主やその家族、繁忙期に依頼

する近隣のパート労働者である。一方、農作物の販売先(図2)をみると、地元の農協に販売する農家は83.8%、卸売市場には53.8%、インターネットや直売所など消費者に直接販売する農家は35%になっている。農家は多様な販売先を確保するとともに流通コストを節約する直接販売を行い、利益の向上を図っている。そして果樹の複合経営により、価格リスクを軽減して収入の安定を図り、また季節ごとの作業量を平準化して農業経営を行っていることがうかがえる。

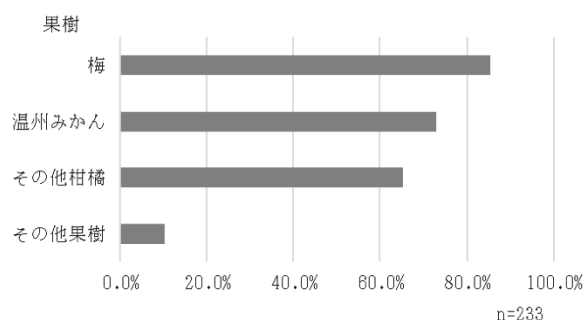


図1 果樹の栽培品目別農家割合
資料：2020年農林業センサス農林業経営体調査より作成。

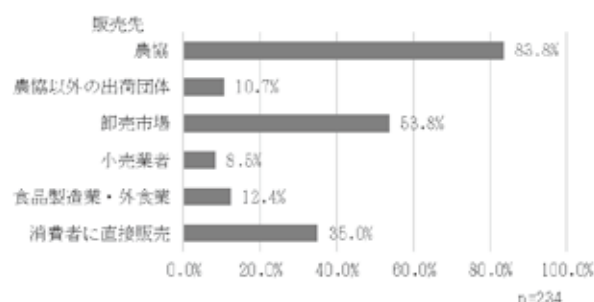


図2 農産物出荷先別経営体数
資料：図1に同じ。

このような上秋津地区では、農業を基軸にした「地域づくり」が行われてきた。2008年には農家を中心となって旧上秋津小学校の廃校舎を改修し、木造の旧校舎を拠点に、農家レストランや宿泊施設などを併設して「秋津野ガルテン」をオープンした。秋津野ガルテンは、住民が出資して設立された農業法人(株)秋津野がコミュニティビジネスとして運営し、グリーンツーリズムを受け入れ、都市と農村の交流事業が行われている。この秋津野ガルテンを拠点に行う農村WH(以下、秋津野WH)は、この都市農村交流事業の一環として開始された。

初期のワーキングホリデーは、それまで上秋津地域の取組に協力してきた大学教員の依頼により、2015～2017年に実施された。現在の秋津野WHは第2期で、2020年10月から国の中山間地域等直接支払制度集落

機能強化事業（以下、集落協定事業）の支援を受けて実施されている。集落協定事業を行う上秋津地区の農家と㈱秋津野は、秋津野WHに関する協定を結び、事業の目的は、①都市農村交流を通じた新たな労働力の確保、②大学生等と農家との交流により農業や農村の意義を再発見し、農家の「誇り」を取り戻すこと、③豊かな地域づくりである。

秋津野WHの仕組みは図3のとおりである。㈱秋津野は、教員からの依頼を受けると、農家に対し、日程や作業内容などの調整を行う。そして教員が同行して上秋津WHに参加する。学生は、3～4人のグループに分かれ、みかんや梅の収穫作業・摘果作業などの比較的単純な農作業を行う。学生と農家は作業をしながらお互いに会話を交わし、親しくなる。参加人数が多いときなどは、秋津野ガルテンで交流会が開催されることもある。また学生の宿泊や食事は、秋津野ガルテンの施設を利用し、その費用は、上秋津地区の集落協定事業から、㈱秋津野に支払われる。参加学生数をみると、2021年度以降は、約150～170人日／年の学生が参加しており、2023年度は、7大学から85名の大学生が、1～4日の農作業に参加している。

上秋津WHは、教員が秋津野ガルテンに依頼して行われ、農学や地域マネジメントを学ぶ学生が、ゼミ活動や実習、インターンシップなど授業の一環として参加することが多い。学生は、事前に農業・農村の現状や秋津野ガルテンの取組などを学習して参加するため、地域に関心を持ち、現地での農業体験活動（実習）で理解を深める。

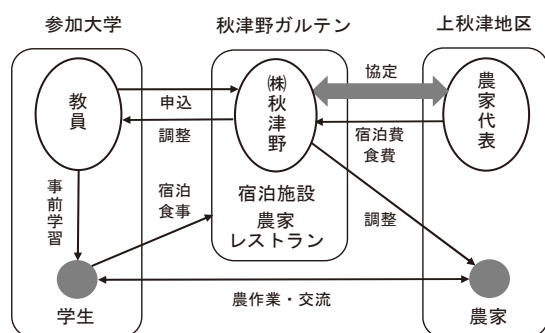


図3 秋津野WHの仕組み

資料：ヒアリングにより作成。

2.2 和歌山大学地域交流援農サークル

「agrico. (アグリコ)」の取組

学生のサークル活動として、農村ワーキングホリデーが行われている。和歌山大学では、地域交流援農サークル「agrico.」（以下、アグリコ）が、2008年に大学公認サークルとして発足し、活動している。それ以

前にも特定のゼミ活動として、学生が農作業や地域の行事を手伝うことがあったが、学生主体のサークル活動としてスタートし、希望する学生は全員参加できるようになった。サークルの会費も安価で参加しやすくなっている。

アグリコの直近5年間の登録者数の推移は、図4のとおりである。2020年には新型コロナウイルス感染拡大の影響で、登録者は大きく減少した。その後もコロナ禍において登録した学生はほとんど活動できず、会員数は減少傾向である。登録して参加しない学生も多かったため、2023年度は実動する意思のある会員を改めて募り、新規入会者6名を含む49名が登録する。学生の所属学部を見ると各学部から登録があるが、観光学部が全体の7割を占め、農業や農村に対する関心の傾向がうかがえる。学生の参加動機は、次の2つのグループに分かれる。これまで農業をしたことのない学生が農業や農村に触れたい、体験したいというグループ、もう1つは、実家が農家など農業に親しみのある学生がサークル活動としても農業をしたいというグループである。全体的に農作業経験のある学生は少ないが、新規会員は先輩の会員と一緒にアグリコがこれまでに関係性を築いた受入農家で援農活動を行う。また、学生の交通手段は、基本的に電車などの公共交通機関を利用し、農家が最寄り駅まで迎えに来る。

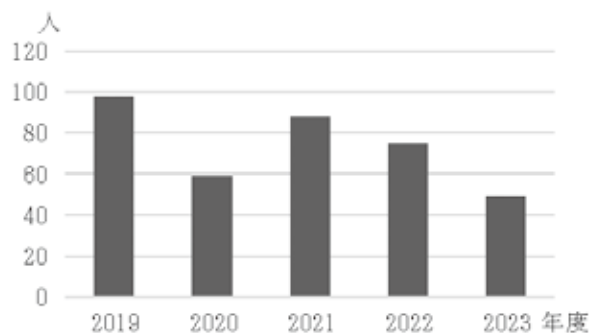


図4 アグリコの登録者数の推移

資料：ヒアリングにより作成。

2023年度のアグリコの活動内容は、表1のとおりである。年間25件（35日）の援農活動を行い、66名（105人日）が参加している。活動場所は、和歌山市、紀の川市、紀美野町など大学に近い紀北地域の市町村が多いが、田辺市や上富田町、串本町、那智勝浦町など紀南地域にも出向いて、援農活動や農家との交流を行っている。また作業内容をみると本県の農業の特徴を反映し、果樹関係の作業が約7割を占める。

アグリコの援農活動の仕組み（図5）をみると、代表（1）、副代表（2）、会計（1）と、約20戸の受入農

家それぞれの「連絡係」の学生により運営されている。連絡係の学生は、担当する農家から援農活動の依頼を受けると、日程や作業内容などを記入した募集要項を作成し、SNSのグループ機能を使ってアグリコのメンバーに連絡・周知する。その後、学生の申込みにより参加者が確定すると、その内容を農家に伝え、当日のスケジュールなどを調整する。その後、連絡係の学生は参加学生を連れて現地に出向き、農作業をしながら参加学生に手順や方法を教える。先輩の学生が後輩の学生に作業方法を教えることで農家の負担が軽減される。このような連絡係の学生が援農活動をコーディネートするアグリコの援農の仕組みは、先輩から後輩に引き継がれ、学生と農家の間に信頼感が生まれて援農関係が長期間続いている。

表1 アグリコの活動（2023年度）

日程	場所	人数	作業内容
4月22日	紀美野町中田	4	野菜苗植え
5月13日	紀の川市桃山	6	桃の袋がけ
5月14日	紀美野町中田	3	田植え
5月30日	紀美野町	2	山椒の収穫
6月10日	田辺市上芳養	2	梅の収穫
6月16日～18日	上富田町岩田	4	梅の収穫
6月16日	上富田町朝来	1	山桃の収穫
6月17日	和歌山市奥須佐	2	桃の出荷作業
6月17日～18日	田辺市上芳養	5	梅の収穫
6月23日～25日	上富田町岩田	4	梅の収穫
6月24日	和歌山市奥須佐	3	桃の出荷作業
7月2日	那智勝浦町小阪	1	草引き
7月16日	有田川町沼谷地区	2	山椒の収穫
7月31日	和歌山市府中	4	ブルーベリーの収穫
8月20日	紀美野町中田	3	草引き
8月26日	和歌山市吐前	2	枝豆の収穫
11月2日～4日	那智勝浦町色川地区	4	ネギ苗植えなど
11月3日	紀の川市桃山	1	みかん収穫
11月9日	紀の川市桃山	1	キャンプ場開設手伝い みかん収穫
12月26日～28日	串本町姫	3	ボンカン収穫
12月29日～30日	串本町姫	4	ボンカン収穫
1月16日	紀の川市桃山	2	梅の剪定枝拾い
2月3日	和歌山市岩橋	1	キャベツ収穫
2月11日	和歌山市岩橋	1	キャベツ収穫
2月17日	和歌山市岩橋	1	キャベツ収穫
全25件 (35日)		66名 (105人日)	

資料：図4に同じ。

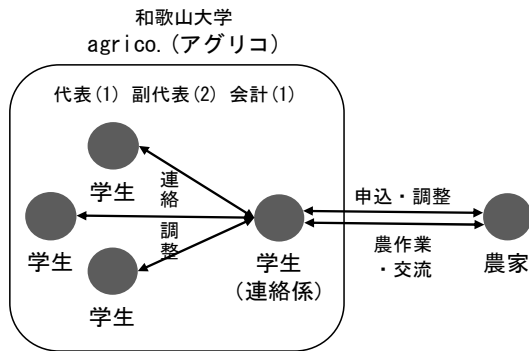


図5 アグリコの援農活動の仕組み

資料：図4に同じ。

2.3 和歌山県が提供するWebアプリ

「わかやまCREW」

最近では大学生等^[5]を対象に、Webアプリから農村ワーキングホリデーを申込み、参加することができる仕組みができています。「わかやまCREW」は、和歌山県が提供する登録制のマッチングサイトで、県内の「しごと」や暮らしに関心をもつ学生と、若者の力を地域の活動に活かしたい農家などをつなげることを目的に、2021年10月から運用が開始された。

これまでホームページに掲載された体験プログラムをみると、しごとの体験や地域のイベント、福祉関係の手伝いなど多岐にわたるが、過疎地域の米作りや茶葉の収穫などの農作業、耕作放棄地の再生活動、獣害対策、空き家の活用に向けた取組、また和歌山県の特産であるみかんや梅の栽培・収穫、「ひろめ^[6]」の養殖体験など、学生が地域住民と交流することを目的に、農業や農村に関係する内容が多い。

わかやまCREWのマッチングの仕組みは、図6のとおりである。地域体験に参加したい学生と学生を受け入れたい農家などの「ホスト」は、わかやまCREWの会員となり申し込むことができる。学生は、当サイトに自分のメールアドレスや氏名、大学名などのプロフィールを登録し、ホストも自分のメールアドレス、氏名、居住地、活動内容などを登録する。そして、学生はホストが募集する地域体験の内容を調べ、利用者限定のサイトから参加したい体験に応募する。その情報はシステムを介してホストに届き、マッチングが成立する。なお詳細のやり取りは、チャット機能を使って行うことができる。

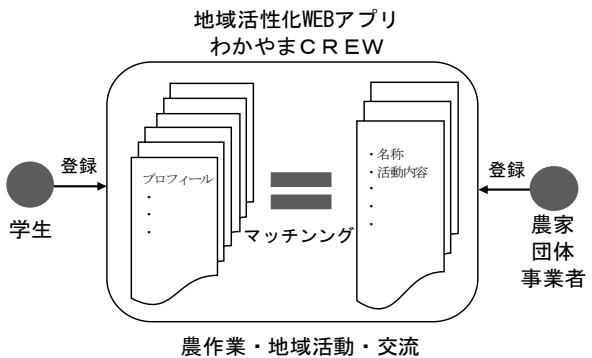


図6 わかやまCREWの仕組み

資料：ヒアリングにより作成。

ホストが掲載する地域体験の募集要項をみると、人口の少ない過疎地域の労働力として「人手」を求めるケースや、住民と一緒に考えて活動してほしいと、新しい「仲間」を求めるケースなどがある。学生はホス

トが掲載する体験の内容に関心や共感を抱き、応募する。学生の活動は無償の地域体験活動であるが、ホストが「お礼」として、学生に宿泊や食事などを提供する場合も多い。

また、当サイトの利用者は、運用が開始されて以降、増加傾向にあり、2023年11月時点の学生の累計登録者数は403人、ホストの登録件数は74件で、マッチングの累計数は150件（2023年10月）になっている。登録学生が在学する地域をみると（図7）、和歌山大学など関西圏に在学する学生が約5割を占めるが、関東圏が約3割など遠方の大学に在学する学生も約半数を占め、全国各地の学生がわかやまCREWに関心を示している様子がうかがえる。

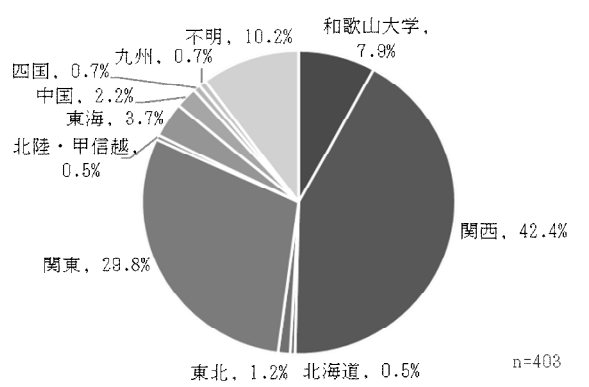


図7 登録学生の在学地域別割合
資料：和歌山県資料により作成。

3. 秋津野WHに参加した学生の感想

本稿では、秋津野WHに2022～2023年度に参加した学生を対象に行ったアンケートのうち、現存する70名の回答について、KH coderを用いたテキストマイニングにより階層的クラスター分析を行った。事前処理として、漢字と仮名表記の統一、同義語を整理するとともに「秋津野ガルテン」を複合語とした。また、地名や人名の固有名詞、「考える」などの一般動詞を除外し、さらに問いに表記された「印象」、「インターンシップ」を除外した（表2）。

表2 事前処理語

同義語	感謝（ありがとう）
複合語	秋津野ガルテン
除外語	考える, 感じる, 知る, 思う, 学ぶ, 行う, 持つ, 印象, インターンシップ

資料：筆者作成。

分析結果は、図8～10のとおりである。左の横棒グラフは単語の抽出頻度を表す。また、右の樹形図はク

ラスターであることを示し、Ward法^[7]により、単語間またクラスター間の距離を横線の長さで表している。さらに、右側にある縦点線より左の塊が、類型化された1つのクラスターであることを示しており、それぞれの図において4つのクラスターが形成されている。各図のクラスターについて、抽出語の前後の文脈も確認しながらみていく。

図8の農家での実習の感想についてみると、上から、①梅などの農作業、②みかんの収穫作業、③農家実習、④体験の感想に関するクラスターがみられる。図8-②については、「みかん」、「作業」が多く抽出されており、文脈からみても、多くの学生がみかんの作業に参加している。また、「収穫」と「大変」、「農業」と「話」が類型化されている。文脈から、収穫が大変だと感じた感想、また、農家と話ができた、農業の話ができたという感想がみられる。次に、図8-①について、文脈から確認すると、晩柑類の「袋」掛けや「梅」について、「一つ一つ」手作業ですることや丁寧に教えてくれたという感想がみられる。また、図8-③の「農家」の文脈をみると、お世話や指導に対するお礼、また、難しさ、大変さとともにやりがい、こだわり、熱い思いなどがみられ、さらに優しい、親切、温かいなど、農家に対する好意的な感想が多い。最後に図8-④をみると、「体験」と「貴重」が最初に類型化され、貴重な体験という感想や「楽しい」という感想がみられる。

図9の上秋津地区の農業や地域づくりの印象については、上から、①人の関係、②農作業、③収穫、④地域と農業の印象に関するクラスターがみられる。図9-④については、「地域」と「農業」の抽出が多い。また最初に類型化されており、農業と地域を結び付けた印象が多い。文脈をみると、地域全体（一体的、一つになって、協力）、活性化、農業の環境面の厳しさなどがみられる。また、「農家」との「交流」と「秋津野ガルテン」が結びついた印象を持っている。次に、図9-①の「人」について、文脈を確認すると、人手不足、地域内の人のつながりや協力、地域外の人との交流についての印象や、受入農家に対する印象などがみられる。図9-②について、文脈をみると、「作業」は大変だったという印象や、「体験」することで農業や地域に興味が湧いたなどの印象がみられる。

図10のインターンシップ（農村WH）を通じた学びについては、上から、①体験・交流、②農家と農業、③人、④働き方についての学びに関するクラスターがみられる。図10-②については、「農家」や「農業」の抽出が多く、文脈を確認すると、農家での「作業」で農業のリアルな現状を学んだ、食の大切さを感じた、人

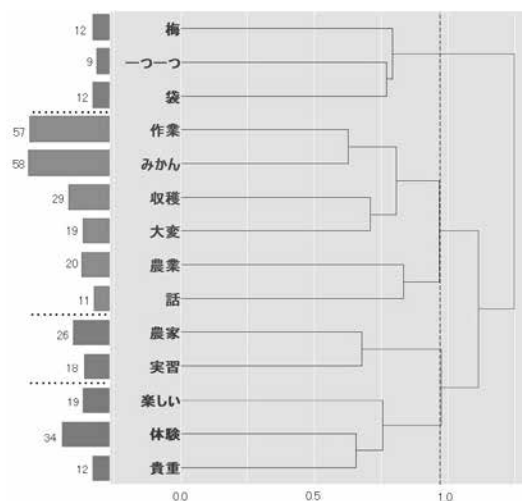


図8 農家での実習の感想についてのクラスター分析

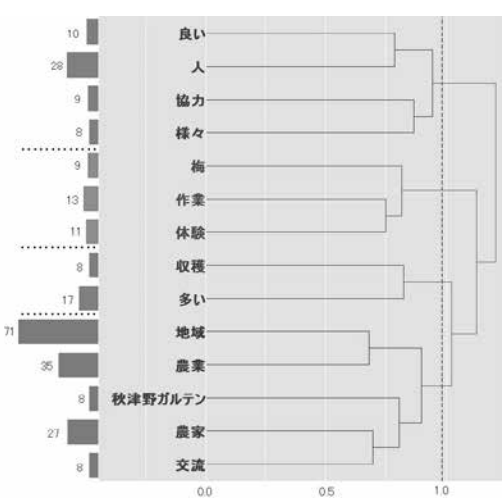


図9 上秋津地区の農業や地域づくりの印象についてのクラスター分析

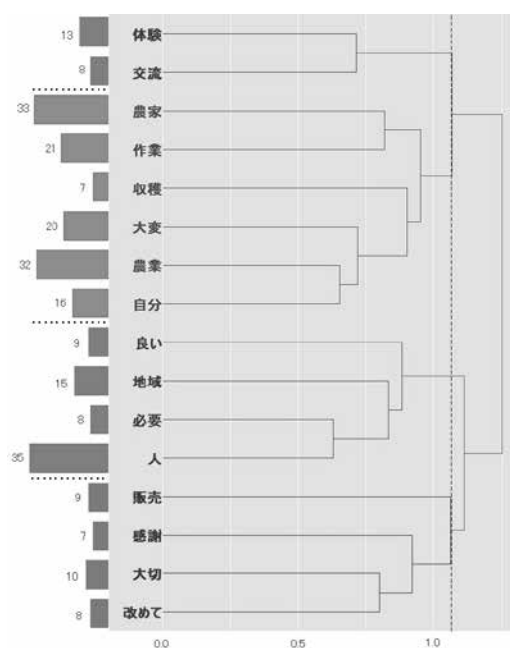


図10 インターンシップ（農村WH）を通じた学びについてのクラスター分析

生経験を聞いて交流の重要性を学んだ、農業の「大変」さ、素晴らしさ、強みなど農業の魅力を学んだなどの感想がみられる。次に、図10-③について、抽出の多い「人」の文脈を確認すると、「地域」の人たちのつながりや絆の大切さ、人手不足の問題などの学びがみられ、図10-①の文脈をみると、「体験」することで達成感を感じた、農家の苦労を学んだ、「交流」することで新しい価値観を持つことができたなどの学びの感想がみられる。また図10-④の文脈をみると、人とのつながりの大切さや食への「感謝」、ワークライフバランスや意欲により「販売」方法を決めているなどの学びの感想がみられる。

秋津野WHは、ゼミ活動や実習など授業の一環として実施されており、大学の専門分野にマッチする学生が参加している。学生は、初めて農作業を行う者も多く、現場で農業を体験し、大学で学んだ知識の理解を深める。分析による抽出語や文脈をみると、学生は、主に農業、地域、そして農家（人）に注目している。そして、秋津野WHでの体験や交流を通じて、中山間地域農業の大変さや人手の不足、農家が丁寧なものづくりをしていることを理解し、また、秋津野ガルテンにおいて農業を基軸に行う地域づくりの取組は、人と人のつながりや協力で成り立っていることを理解している。学生の中には、WHや地域研究のために何度も現地を訪れる学生もいる。

4. おわりに

これまで、和歌山県において行われている学生の農村WHについて、ゼミ活動や実習など、授業の一環で行われる形態、課外活動のサークル活動として行われる形態、また、行政が提供するITを活用したマッチングシステムをみてきた。これらの農村WHの取組（表3）をみると、実施主体は、受入側農家、参加側学生、行政と立場が違うことから、目的は、労働力の確保と提供、地域の活性化という違いがあるが、いずれも直接的な金銭のやりとりではなく、労働力の確保とともに農家と学生の交流による効果を期待して行われている。また、先行研究で課題として挙げられた農家側の負担や学生の特性については、比較的単純な作業を学生に依頼することや宿泊と食事を地域のグリーンツーリズム施設において合同で行うことにより農家の負担軽減を図り、また学生の特性を考え、連絡係を設けて先輩の学生が後輩の学生に作業を指導する仕組みは、農家の負担軽減や信頼感につながり、農村WHを持続させている。さらに参加の調整機能については、地域の農家組織や連絡係の学生が担い、またITを活用したWeb

表3 和歌山県における農村WHの取組

	秋津野WH	agrico. (アグリコ)	わかやまCREW
実施主体	(株)秋津野	アグリコ	和歌山県
参加者	教員・大学生	和歌山大学生	全国の学生
目的	新たな労働力の確保、交流による農家の「誇り」回復	援農・交流を行うサークル活動	関係人口の創出による地域の活性化
内容	農作業・交流	農作業・交流	農作業・地域活動・交流
仕組み	・教員が授業の一環で依頼 ・(株)秋津野が農家と調整 ・事前学習 ・学生の参加	・農家から連絡係に依頼 ・連絡係から会員に周知 ・学生の応募→連絡係が調整 ・参加→連絡係が指導役	・アプリに登録(学生・農家等) ・ホスト(農家等)が募集 ・学生の応募、マッチング ・参加
謝 礼	秋津野ガルテンの滞在 (集落協定事業)	原則、無償 ※ お礼として宿泊・食事など	原則、無償 ※ お礼として宿泊・食事など

資料：筆者作成。

システムが遠方からの学生参加を可能にしている。

注

最後に、このような交流を重視する農村WHの現段階の意義をまとめておく。

まず第1に、学生の労働力を提供する社会貢献活動となっていることである。農繁期における収穫作業などの学生の実習や、サークル活動での援農活動は、人手不足の農業に労働力を提供し、農家は負担を軽減して受け入れている。

第2に、農業・農村についての学びの提供である。授業の一環で参加した学生の感想から、農家との交流により、農業・農村に対する理解や学びを得られたことが見受けられる。

第3に、農的関係人口の創出である。サークル活動の連絡係の学生と農家との間につながりが生まれ、また授業の一環で参加した学生の中には、何度も現地のWHに参加する学生や、地域の取組を研究の対象にする学生がみられる。農村WHは、関係人口創出のきっかけになっている。

現在、わが国の人口の約8割が都市的地域に集積し、都市に住む学生は農業・農村に無関心な者も多い。農村WHは、マッチングアプリなどの仕組みもでき、全国の学生に農業・農村体験を簡便に提供しうる。農村WHへの参加を通じ、多くの学生が農業・農村への関心を高めることが期待される。

謝辞

本稿を筆記するにあたり、学生アンケートの個票を提供いただき、ヒアリング調査にご協力いただいた(株)秋津野の柏木 満専務様をはじめ、和歌山県地域振興課、和歌山大学agrico. (アグリコ)のご担当の皆さまに感謝申し上げます。

- [1] 藤井・藤田 (2018)
- [2] KH coder 3.Beta.03i (樋口2020) を使用した。
- [3] 2020年農林業センサス農林業経営体調査によると、上秋津地区の経営耕地面積の97.9%が樹園地である。
- [4] 同上調査によると、上秋津地区の農林業経営体237のうち法人化しているのは2経営体である。
- [5] 利用者は、4年生大学、大学院、短期大学、高等専門学校などに所属する18歳以上の学生である。
- [6] 「ひろめ」は葉が広い海藻で、田辺湾を中心に養殖や販売に取り組まれている。
- [7] KH coderの階層的クラスター分析では、Ward法が設定されている。

参考文献

- 1) 樋口耕一 (2020)『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して—』ナカニシヤ出版
- 2) 藤井至・藤田武弘 (2015)「域学連携型農村ワーキングホリデーによる地域コミュニティの変容」農業市場研究24 (1), 41-47
- 3) 藤井至・藤田武弘 (2018)「都市農村交流と農業・農村振興」『現在の食料・農業・農村を考える』ミネルヴァ書房, 218-232
- 4) 今野聖士・泉谷真実・柳京熙 (2021)「学生援農ボランティア組織における運営方式の規定要因: 農業労働市場における市場と非市場の関係性」農業市場研究, 29 (4), 1-7
- 5) 今野聖士・泉谷真実 (2023)「学生援農ボランティア参加の促進条件に関する研究」農業市場研究, 31 (4), 43-51
- 6) 鈴村源太郎 (2010)『農村ワーキングホリデー・ガイ

ド』家の光協会

- 7) 竹本田持 (2005) 「大学における学外実習教育の現状と課題」『わが国における農村型ワーキングホリデーの実態と課題』農林水産政策研究所, 63-79
- 8) 山口創・趙松楠・中塚雅也・山下良平 (2014) 「テキストマイニングによる農村地域課題の特性と変化の把握ー兵庫県を事例としてー」農林業問題研究 50 (2), 107-112
- 9) 山口創 (2020) 「テキストマイニングの特徴と農村計画研究への導入」農村計画学会誌 39 (3), 294-297